Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092（731）2372
FAX 092（731）2373

No.91
2007年4月1日

〈URL〉http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp

表紙絵　日雇い仕事を待つ（画・甲斐大策）

四年越しの悲願、用水路第一期13キロ、遂に完成	中村　哲
会計から垣間見るアフガニスタン	西　和泉
巣食っていたモヤモヤ吹っ飛ぶ	横山尚佑
サツマイモは本格的な普及段階へ	進藤陽一郎
宝物のような時間をもてました	荒野一夫
一仕事終えた喜びと達成感	芹澤誠治
カフェの夜は更けて	杉山大二朗
チャクニに負けたわが二年半	松永貴明
十代の若者達に鍛えられる日々です	本田潤一郎
救う、ことで救われた	石橋忠明
ワーカーＯＢ報告③農業を通じ、「一隅を照らす」	橋本康範

ペシャワール会は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

四年越しの悲願、用水路第一期13キロ、遂に完成

――三月十五日、通水の祝典を挙行――

PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長　中村哲

水路完成の祝典に集まった人々

最難関のブディアライ村を攻略

二〇〇七年三月一五日、わずか二五メートルの水路区間に六〇名の作業員が殺到した。ブディアライ村を通過し、四年の歳月をかけ、第一期一三キロメートルの水路が開通するのである。現場は興奮と活気にあふれていた。

ブディアライ村は第一期工事の最難関と目されていた。二・五キロメートルは、これまでの工事からすれば決して長い距離ではない。しかし、長大なダラエ・ヌール渓谷を下る土石流は想像を超えるものがあり、皆半信半疑だったのである。約五〇キロメートル以上の渓谷は、標高差が三千メートル以上、一雨降れば、タタミの大きさの巨石さえ簡単に転がしてしまう。そこで私たちは、激流の通過する主な河道四ヶ所（計三〇〇メートル）にサイフォンを設置、二・二キロメートルの開水路の両岸は全て二段の蛇籠工を施し、堅牢な構造をめざした。谷を横断するから、もちろん橋梁や小さな水道橋が多数必要となり、水路工事始まって以来の支出と努力を覚悟していた。

集中豪雨は、春分の日を境として頻発するようになる。そこで、「三月二〇日までに全ての主要工事を完了」と檄を飛ばし、薄氷を踏む思いでこの数ヶ月間を過ごしてきた。サイフォンで長いものは一二〇メートル、せっかく出来かけても、一発の豪雨で崩れ去るのは昨夏に体験ずみである。昨年一〇月以来、「春分の日まで」を合言葉に、皆必死になって働いた。その結末を今目前にしようとしていたのである。

土石流対策に蛇籠一六〇〇トン

この一年の困難はこれだけではなかった。昨年七月に取水口を土石流が襲い、大規模な浚渫・改修工事を迫られた。ブディアライ村通過を遅らせてはならないので、私が単独で任に当たり、クナール河の水位が下がる一〇月以来、四ヶ月をかけて決行、正月にはブディアライ村で指揮を執る予定であった。取水堰の工事そのものは、度重なる改修を避けるため、長さ二二〇メートル、幅五〇メートルにわたって巨石を並べ、主要河道の全面的な堰上げに成功、洪水に十分耐えるものとなった。と述べるのは簡単だか、案外工夫が要った。片側から斜めに突き出す堰は、水制と同様、先端に深掘れを生じる。すると堰上げの水位が下がって低水位の冬の取水が足りなくなって、毎年改修を求められる。この状態では、第一期工事は画竜点睛

を欠く。

対岸は余りに遠いし、対岸の護岸は巨石運搬を大量に必要とする。クレーン車など夢のような話である。そこで計画したのは、「移動島方式」という奇想天外な方法であった。

堰の先端に貯石場を設け、ダンプカーにして八〇〇台分を集めて広場を作った。そこに掘削機、ローダー、ダンプカー各一台が動けるスペースを確保、次いで先端を堰から切り離して島にする。

1600トンの蛇籠を擁して完成した強固な取水口

取り残された重機が、取水口側の島のふちを削っては対岸側を広げる。そうして、水底に巨石を敷き詰めながら対岸へ到着するのである。数十メートルを渡るのは容易でないから、一日の作業が終わると筏で行き来した。対岸へ到着したのは三週目のことであった。

着いたのは良かったが、今度は石材が不足して護岸工事ができない。更に次の策は蛇籠の応用である。籠と作業員を筏で運ばせ、川原の玉石をローダーとダンプが集積、一列に並べられた蛇籠の天井部だけを開けておき、掘削機が玉石をすくって入れる。いっぱいになると、作業員が待ち構えて天井を閉める。こうして、堰対岸の洗掘が予想される箇所一面に蛇籠を絨毯のように敷き詰め、各蛇籠を連結すると、全体が岩盤のようになってびくともしない。水から遠い部分にはコンクリートを流し込む。更に川砂利を覆って仕上げとした。ひと夏過ぎれば、何でもない玉砂利の川岸に見えるはずである。しかし、中身は八〇〇個の蛇籠（約一六〇〇トン）が一塊になった不動の板である。

野暮ったい方法なので、専門家が見れば大笑いするだろうが、他に名案がなかった。だが、丸い巨石を敷き詰める捨石工、玉石を詰めた蛇籠工、これらの激流に対する強靭さは実証済みで、これで堰の致命的な欠陥が克服できたと確信している。これは、四年越しの悲願だった。真冬の川べりは凍りつくような寒風にさらされる。私には「年寄りの冷や水」そのもので、その後ひどい風邪にかかったが、作業員たちは一言も不平を漏らさず、黙々と働いた。

外国ＮＧＯの堰造成で洗掘

だが次に待っていたのは、四・八キロ地点で起きた水路決壊の危機である。取水口の「大工事」が一段落しようとしていた矢先の一二月二五日、同地点で約一五メートルが崩落した。この程度の決壊には誰も驚かなくなっていて、対処方法をたちまち会得、年を追って水路は安定しつつあった。不審に思ったのは、最も川の水位が下がる時期のできごとだったからである。

修復工事を見回りに出かけて慄然とした。真夏の洪水ならともかく、真冬の乾期にクナール河の分流が決壊した水路の足元を洗っている。同地点は二〇〇五年三月に開通した難所で、垂直にそそり立つ岩盤ぞいに長さ約一二〇〇メートル、高さ一二～一七メートル、幅五〇メートルを盛り土して作られたものである。地盤が軟らかいため、一年半をかけて徐々に荷重を増し、ほぼ安定したと信じていた。何と、その盛り土の直下を急流が洗い崩している。

原因は人為的なもので、取水口から約一千メートル下流の対岸に設けられた堰のためであった。四年前の夏、某外国ＮＧＯが、左岸側の主流を堰き止めて、右岸側の分流に流す工事をした。目的はよく分からない。その後、私たちの水路が走る

右岸側が年々洗掘され、国道や耕作地が次々と濁流に消えていった。私たちのマルワリード用水路は、取水口から四・八キロ地点までを道路と共にクナール河ぞいを流れる。このため、着工から現在まで、護岸工事の連続であった。実際、総工費の半分以上が「水路保護」に使用されたと言っても、決して誇張ではない。

しかし、恨みがましいことを述べても水は流れない。正月明け早々から、再び水との格闘が始まった。同三・六～四・八キロ地点は、造成された盛土上の水路で、全体が湿地帯の上にある。四年前着工したときは、クナール河の河岸が水路から約五〇〇メートル離れていた。それが、年毎に近づき、眼下に見る急流が二〇メートルの至近距離に迫っていて、増水期の四月に大規模な決壊が起きるのは、火を見るよりも明らかだった。

方針は二つ、①先ず近づいてくる河道を元の位置に押し返すこと、②盛り土直下の浸透水を処理し、地盤の軟化＝地滑りの危険を極小に抑えることである。それも二ヶ月月以内の期限つきである。第一期工事完成を直前に、さすがに肝が冷えた。過去、怖い目には何度も出会った。しかし、これほどの事はなかった。

護岸工事と土石流対策はこれまで手がけてきたが、一・二キロに及ぶ湿地帯の対処は初めてである。いくら多忙だったとはいえ、この事態を予測しなかった粗雑な計画に思いを馳せ、目の前が真っ暗になった。所詮、素人だったのだ。工事完遂を夢見て連日突貫工事に忙しい職員たちを見ると、言葉に出す勇気が湧かず、まる一日呆然としていた。また、話したとて、いたずらに不安をかき立て、小田原評定を招くばかりだ。

だが座して待つなら、確実に第一期工事は失敗する。総工費一〇億円は夢と潰え、数千町歩の田畑は再び砂漠化し、ペシャワール会も解散に追い込まれるだろう。一か八かでも、ここは積極的な手を打つべきだ。己の無知と非力さ加減はよく分かった。しかし、相手のことはよく調べていない。先ずは調査である。

「これならいける」

そこで行なったのは、これまでの護岸工事のときと同様、付近の小高い丘に登って地図を作成することであった。川幅一キロのクナール河はあまりに大きく、河岸で眺めていても全貌がつかめない。また、アフガニスタンの詳細な地図は入手困難である上、河川敷の河道は常に変動する。高いところから見ると渇水期の河道と砂州を一望できる。同時に、記録に収めてきた二万枚の現場写真と同地域の状態を照合、過去の河道の変遷を確認するのである。

すると、河道が近づけば近づくほど、盛土の部分決壊と干割れの頻度が増えている。地盤軟化を促す浸透水の多くは、直接、最寄りの川の砂礫層をくぐってくることが分かった。これならいける。河道を遠ざけるだけで十分の効果があると読めた。少なくとも石出し水制による護岸と河道変更は成功してきた。長さ一三〇メートルの水制三基が三〇〇メートルごとに置かれ、迫り来る分流を遠ざける工事が始まった。

湿地帯処理については、日本で土木関係者にも相談、目の粗い砂で透水層を敷き（サンドマット工法）、さらに砂利を厚めに置いて重機やダンプカーの交通路を確保、その上で排水路を掘削した。更に軟化した盛土の下段に腹付けして、新たな盛土を厚く加えた。日本側の事務局には「緊急予算」を頼み込み、一時はダンプカー四五台、ローダー七台、掘削機一〇台が稼動していた。河道の変化による対岸への被害を避けるために、湾曲して襲ってくる主流を分割して処理した。一日一日が綱渡りのようで生きた心地がしなかったが、詳細は割愛する。

一月一二日に工事が始まって四〇日目、クナール河が増水を始める頃、逆に湿地帯の水が引き始め、河道は三年前の位置に戻った。全作業日数四八日、取水口改修から五ヶ月間を経過していた。やっとブディアライ村の作業現場で指揮を執れるようになった三月初め、アフガン人や日本人職員の必死の努力で、計三〇〇メートルの長大なサイフォンが既に完成しており、先は見えていた。第一期工事完成は確実と判断、三月一五日に水を流して確認、職員の間だけでささやかな内祝いを行った。当日働いた作業員四〇〇名も集まり、喜びを分かち合った。工事を始めてまる四年である。

特に、この半年が一〇年を経たように思われた。私の喜びがひとしおであった事は、言うまでもない。

荒れ地に緑がよみがえる奇跡

この四年間で、工事に従事していた技師や現場監督は三分の一に減り、労苦を共にしてきたのは、主に周辺農民たちであった。彼ら自身が有能な石工であり、蛇籠工であり、優れた水の観察者だったことは知られて良い。この工事で事故による重傷四名（頭蓋骨骨折一、手足の骨折三）、死者は作業中の心筋梗塞一名、事故死は一人も出さなかった。

総延長13キロメートルに及ぶ用水路の最終地点

今や吾が「マルワリード用水路」は総延長一三キロ、一日最大送水量五〇万トン、既に砂漠化から回復して耕作できるようになった田畑が一五〇〇町歩、渇水時に送水できる耕地は約六千町歩、第二期工事によって潤し得る灌漑面積が推定五千町歩以上、ニングラハル州北部の農民たちの守護神となった。一木一草もなかった荒地に緑がよみがえる奇跡を見た者は、ひとしおの感慨を以って、生きる恵みに感謝するだろう。

折からトルハム国境では、自爆攻撃で錯乱した米兵が群集に乱射、一八名の市民が死亡したとの報が伝えられていた。四方八方が敵に見えたらしい。人々の方でも怒りが爆発、直ちに一千名の反米デモが荒れた。雪解けと共に活発化する武装勢力に備え、欧米軍は四万数千名の兵力に膨れ上がっており、アフガニスタンの農村部が「危険地帯」なのだと言う。確かに、外国兵が居るところは危険だ。最近、彼らの横暴さが目に余るようになっている。先日、米軍の装甲車の車列からいきなりワインのビンが投げつけられ、フロントガラスが大破、私の運転手は頭部に重傷をおって死ぬところだった。最近、主婦がジャララバード近郊で、やはり酒ビンを投げつけられて死亡している。戦争は狂気を呼び、狂気が戦争を拡大する。それだけではない。今年は降雨がやや多かったとはいえ、年毎に進行する乾燥化は収まりそうにない。人々の窮迫感は日毎に高まっている。

このような中であればこそ、完成した「マルワリード用水路」は、逃げ場を失った多くの人々に希望を与え続けるだろう。「アフガニスタン」は日本で忘れ去られたが、私たちの共有した労苦と喜びの結晶は、人々の命の営みが続く限り記憶されるだろう。

三月一五日、水路沿いの無数のヤナギがいっせいに芽吹き始め、水路完成を祝福した。

中村哲（なかむらてつ）
九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二二年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院ＰＭＳをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千四百ケ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手、〇七年三月完成。年間診療数約九万人（二〇〇五年度）。

＊ワーカー通信

会計から垣間見る アフガニスタン

ジャララバード事務所会計担当　西　和泉

給料日風景

昨年九月からジャララバード事務所で会計の仕事に携わっている五七歳のおじさんワーカーです。この間あきれたり、うなずかされたりしたことを紹介したい。

現在アフガンのＰＭＳの活動では正職員から日払いの労働者まで約四五〇名が働いているが、月末の木曜日は九〇名ほどのアフガン人正職員の給料日だ。半ドンの仕事を終えた職員が会計の部屋にやって来る。示された明細に文句を言ったり、説明を求める職員の多さには面食らう。時に明細表に誤りもあるのだが、とにかく文句を言ってみて、増えれば御（おん）の字とする感じを受ける。遅刻、欠勤、休日出勤、超過勤務、前払いの清算などプラスマイナスが多岐にわたり、明細が英語表記であることも一因なのだが、とにかく粘る。説明役のアフガン人会計職員のハニフラは「なかなかわかってくれないので頭が痛い」と嘆く。事務や会計のミスと認識するとその場で長々と批判演説をぶつ「要注意人物」もいるという。同じようなことによく出くわす。道路で車がお互い譲らず、双方がどなりあったりするなど、生活の中で自己主張の強さにあきれることがしばしばだ。これもきびしい砂漠の自然の中で「戦って生き抜いてきた」生きるすべであり、温帯モンスーンのぬるま湯になじんだ日本人とは違うのかなと納得してしまう。

おんぼろ札

首都のカーブルでは政府発行のアフガニー札の流通が多いが、パキスタンに近いジャララバードではパキスタンのルピー札が幅をきかす。しかし給料は政府の指示も無視できず、アフガニー札で払われる。ところがこのアフガニー札がとにかくボロボロだ。とりわけ日払いの労働者に支払われる一〇〇アフガニー札（二四〇円に相当）は破れたり、激しく汚れていたりと散々だ。財布を使用しないからと思われる。自分たちで汚しあっているのにしばしば受け取りを拒否される。会計はこれをせっせとセロテープで修復するのだが、修復不能のものは、取引のある両替商にいやな顔をされながらも交換してもらう。本来は銀行が無料でまともな札と交換してくれてもよさそうなものだが、国営のアフガニスタン銀行に行って七～八パーセントの手数料を取られたことがある。国は自分で発行する紙幣に責任を持てと言いたくなる。海外からの送金も正常化しつつあるが、米ドルの送金にはテロへの関与を懸念するアメリカのチェックが入り、日本から送金されたお金がたらいまわしされることがある（日本の銀行からの送金でも米ドル送金の場合は一旦アメリカを経由される）。ふつうの状態への途上だ。

ＰＭＳのアフガンでの予算規模は、ここのふつうの人の生活レベルから見れば巨大だ。私たちの管理体制や能力が不備ならば、いつでも外国からの金としてつけこまれたり粗雑に扱われる。日本の日常とアフガンの日常の持つ大きな差異をきちんと認識し、ともに仕事をする中で信頼関係を作っていきたい。

▼郵送方法の変更について▼

＊一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

＊ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

巣食っていた モヤモヤ吹っ飛ぶ

灌漑用水路建設担当　横山尚佑

不安の中で勝算あり

カナル（用水路）で働き始めて間もない頃、まだ掘削のされていなかったブディアライ村をよく覚えている。山に登り、これから水路が通る場所を俯瞰した。一面荒れた大地で昔は畑だったと聞いてもピンとこなかった。

個人的な話で恐縮だが、悩みというか、モヤモヤしたものを吹っ切るためにこの事業に参加させて頂いている。当時もそれが吹っ切れずにいたのを覚えている。

あれから一年、そのブディアライ通過が目前に迫っている。ブディアライ地区は地形の都合上、コンクリート構造物で通さなくてはいけない箇所が多く、第一期工事最後にして最大の難関である。現在植樹計画担当の僕も一月の下旬に急遽助っ人（自分はそう理解している）としてK3地区の排水門建設を担当することになった。

過去二つの排水門を担当した経験はあるものの、やはりド素人であるし、ブランクもある。本来の担当の植樹計画も二月、三月の植樹シーズンに突入するので、進行状況を把握し指示しなくてはならない。自分のキャパシティーを超えている気がして、不安だらけで毎日毎日朝から晩まで仕事の事で頭がいっぱいだった。ただ不安ではあったが、勝算はあり、気合の入った毎日だった。

心地よい疲れ

道具・資材を揃え、段取りを組み、レイバーと共にシャベルをふるう。文字通り右も左もわからないまま現場に放り出された一年数ヶ月前と比べ、シャベルの使い方が少しは様になってきたように思う。昼飯をがっつき、またシャベルを手に取る。仕事終了時にはクタクタになっている。だがその疲れはとても心地よいもので翌日の作業への張り合いになるものであった。ブディアライに水を通す。その最前線にいれる事が嬉しかった。そして約三週間後、段取りが上手く取れなかったり、連絡漏れがあったりと周りの方々に迷惑をかけながらもK3排水門は無事完成した。先生に仕事が早くなった、とお褒めの言葉まで頂いた。

間もなくブディアライの大地のド真ん中を真っ直ぐに横切る五・五メートル幅の水路に水が流れ込む。勿論K3排水門にも流れ込む。まずは無事に流れる事、そしてこの先何十年何百年とその役目を果たし続けてくれる事を祈るばかりだ。

日々の生活は突貫工事の連続で忙しく、何か物事を思索するということはあまりなかったが、とにかく仕事には真剣に向き合ってきたつもりだ。現地人とのぶつかり合いも多かったが、その中で彼らの篤い信仰心や、礼儀正しさ、屈託のなさ、何でも利用する生活の知恵、分かり易いくらいのずる賢さ、全てひっくるめて何というか人間臭さに生で触れ、気がつけば、巣食っていたモヤモヤはどこかに吹っ飛んでいた。

水路沿いに植樹予定の柳・桑が大きくなったらまた山に登り、景色の一新されたブディアライを俯瞰してみたいと思う。

用水路建設のレイバーたちは主に地元農民たちだった

サツマイモは本格的な普及段階へ

農業計画担当　進藤陽一郎

二〇〇キロのイモ越冬に成功

今年も春を迎え、サツマイモの苗作りから一年の作業の始まりです。ダラエヌールに初めてサツマイモが日本から持ち込まれて四年。農業指導員の高橋さんから前任の橋本さんへ、橋本さんから現在の伊藤さんと私へとサツマイモは「主役は農家」を合い言葉にバトンリレーの様に受け継がれてきました。リレーと言葉にするのは容易ですが、一つの試行錯誤が一年を要する農作業です。例えば日本からサツマイモと共にやってきた病原菌の処理、四〇度を超える夏場の植え付けとその後の管理、冬の間の芋保存、また春の苗の育て方といった一つ一つの成功と失敗を得るために一年一年を費やし、やっと手にしたサツマイモは、小さくはあれどもはや軽いものとは言えません。

今年は一番の懸念だった冬の間のサツマイモ保存にも成功。地中に掘った縦穴と、麦わらを細かくした資材だけを使った簡単な方法で九割以上、約二〇〇キロの芋を元気な状態で冬越しさせることができました。

「やったねモハマドさん、今年は周りの農家にもこの芋を分けよう！」と喜びの声をかける私。「おぉそうだな！　今年は俺んちの食用分も殆どお前に取られたからたくさん分けられるな！」とニヤニヤ喜びの声（？）を返す試験農場担当の一人、ちょっとはにかみ屋のモハマドさん。彼もやっとここまでたどり着いたサツマイモ栽培の立役者ですから、内心はとっても嬉しいに違いありません。

「給料はいつ上がるんだ？」

こうして現在はアフガン産サツマイモを苗作り用として有志農家にも配って回り、一緒にサツマイモ栽培に挑戦してもらう段階に入りました。「やったな！　俺達の仕事がこれでまた一つ前進するじゃないか！　……で、PMSから出る俺の月給はいつ上がるんだ？」と、サツマイモ普及の喜びを押さえながら（？）ニヤニヤ語りかけてくるいつも一言余計なモハマドさん。「いやいや、もっと多くの人達にサツマイモを届けられる様にしようね。まだまだこれからだね！」と、こちらも喜びを押さえてニヤニヤです。

私はこの頃やっと「主役は農家」なる言葉の意味を実感しつつあります。それは恐らく現地の農家を「立ててあげる」事や、こちらの計画した枠の中だけで彼らに活躍してもらうといった単なる口先や小手先の手法ではなく、ただ「最後に残るものは現地の農家と彼らの生活だけ」という事実を真剣に受け止めるその態度なのでしょう。確かに、農家達の考えや人格に応答するためには余計に多くの労力がかかったり、気疲れする事が多くなったりしますが（「それはお互い様だ！」と言われそう…）、逆にそうしたやり取りこそがこの農業計画の要点ならば、ひとえに私のできる事をやろうと思うばかりです。

共に働き、共に生きる

「共に生きる」。私が現地ワーカーとして来る際に自分の目標として胸に刻んだもう一つの言葉です。考え方も求めるものも異なるアフガニスタンの人達との間で「援助する側」「援助される側」になるのではなく「共に生きる」側に立つ。実際は共に生きるどころか自分自身のいのちともまともに向き合った事のない私ですが、ここにいると働く事も喜ぶ事も元々人と人の間にあるもの、という意外に簡単な事実に気付かされます。そして、その点に気付くにつけ、そもそもPMSの全事業とは「共に生きる」という事を強く貫いている、という足元にある強烈な事実を今更の様に思い知らされ、内心妙に誇らしく嬉しくなっている今日この頃です。

最後に、この会報を手にされている皆様、ご支援ありがとうございます。ささやかながら皆様の心身の平安を願って結びとさせて頂きます。

宝物のような時間をもてました

ジャララバード事務所炊事担当　荒野一夫

友人たちのEメールが支え

昨年六月に炊事担当として派遣され、二月に派遣終了となりました。

派遣当初は真夏で野菜の種類も少なく、慣れないこともあってメニューに困り、Eメールで友人達にSOSをして、沢山のアドバイスを頂いて感激したり、フタの合っていない鍋での炊飯に苦労しましたが次第に慣れてきました。

野菜はジャガイモ・ニンジン・タマネギ・オクラ・キャベツ・キュウリ・ニラ・ナス・ニガウリ程度でしたが、夏が去るとともに野菜の種類が増え、大根・ネギ・ほうれん草・かぶ・カリフラワーなど美味しい野菜が出回り、時にペシャワールから、ジャララバードで手に入らない白菜を送ってもらえてメニューに幅ができました。

これらの野菜を色々な料理にして美味しいと言ってもらえましたが、冬のジャララバードで見られる一番の野菜はカリフラワーで、八百屋は勿論(もちろん)、道端に積み上げただけで沢山売られています。湯がいてマヨネーズで食べるしか知らなかったのですが、友人達のアドバイスで一番よく食べる野菜になりました。玉子・オイスターソースを片栗粉に混ぜての唐揚げが一番人気で、中華や和風のドレッシングでのサラダもよく食卓に上りました。

歯槽膿漏からの歯痛でアフガンでの抜歯も覚悟しましたが、Eメールでバス法という歯磨き法を教えてもらい、歯痛がおさまったのも思い出深い出来事でした。私のアフガン暮らしは多くの友人達のEメールで支えて頂きました。

読み返しては何度もアフガン生活を楽しむつもりで日記を綴り、毎週BCCで友人達に送信しました。公開日記にしたことで最後まで記すことができたようです。

早期退職してよかった

元々英語ができず、パシュトゥ語も身につきませんでしたが、PMSの地元スタッフだけでなく、資材の買い付け等で出会うアフガンの人々に親切にして頂きました。親しくなれた人々ともっと会話して交情を深めることができればもっとよかったと思えますが、それでも思い切って早期退職しPMSの活動に参加できたことは、私の残りの人生にとって宝物のような時間となるでしょう。派遣して頂いたことを本当に嬉しく思っています。

アフガンを去るにあたって、朝礼で地元スタッフにパシュトゥ語で次のように読み上げ、大きな拍手と抱擁・握手をして頂きました。

「日本に帰ります。言葉のできない私に、皆さんは親切にして頂き本当にありがとうございました。ここで暮らした一年は私の六〇年の人生で一番楽しい一年でした。日本に帰っても皆さんの健康と、アフガニスタンの平和をずっと願っています。ありがとうございました。さようなら。」

●ペシャワール会総会／現地活動報告会のお知らせ●

【日時】6月2日(土)　福岡市
【会場】九州大学六本松キャンパス
N110教室
(福岡市中央区六本松4-2-1)
総会　11時～12時(予定)
現地活動報告　13時～16時
＊詳細は同封のチラシ、またはホームページをご覧下さい。

一仕事終えた喜びと達成感

灌漑用水路建設・渉外担当　芹澤誠治

集中豪雨と復旧工事

今日三月一五日、最終地域ブディアライ全域に、工事完成のセレモニーである通水が行われ、しばらく振りにJの池の水門が開かれた。このJの三基の水門が完成したのが、昨年の七月一一日、思えばそれから九ヶ月、我等のカナル・チームは、苦闘の連続と言っていい毎日だった。四ヶ月一滴も雨が降らなかったのだが、七月二二日の夕方、ジャララバードにお湿りがあり、ああよかったな、と思っていたら、ダラエ・ヌールの伊藤くんから、「集中豪雨があり、涸れ川に鉄砲水が流れ、Jの本水路があぶない」という一報が入った。

翌日、早速現場に急行して点検すると、せき止めてあった涸れ川の堰の一部が崩壊して、土石流が本水路に流れ込み、水路をJの地点まで逆流して、ジャカゴ壁を崩して分水路を破壊していた。いやそればかりでなく、遠く離れた取水口でも、事件が起こっていた。

取水口付近に、米軍の下請けのインドの道路会社があるのだが、彼らの建物が、従来の涸れ川の流れを封鎖したため、土石流と化した鉄砲水が方向を変え、我等の取水口に襲いかかり、半壊とまではいかないが、それに近い被害を被ったのだ。幸い基礎工事はしっかりしていたので、上部の構造物が壊されただけで済んだが、水路は大量の土砂で埋まり、全然、機能を果たさなくなっていた。急遽、日本から戻られた中村医師の指示の下に、苦難の復旧工事が、約二ヶ月間続いた。

丸四年で完成

アフガンの涸れ川は、アフリカの砂漠の涸れ川と違って、砂漠の中に消失したりはしない。一〇〇メートル以上もある河原に、角が取れて丸くなった巨石がゴロゴロしており、普段、水は一滴も流れていない。二～三月の雨期に巾五メートル、深さもせいぜい五～三〇センチくらいに水がチョロチョロながれているだけ、正直言って、私は涸れ川は死んだ川だと思っていた。生きていた涸れ川、それも土石流となって復活する涸れ川、なんて想像できますか。

一一月から始まったブディアライの本水路の工事も、この涸れ川との闘いだった。涸れ川の下をくぐり抜ける四本のコンクリートのサイフォン、(内二本は一二〇メートルのという巨大さ)、二本の橋、四本の水道橋。これらの工事を雨期の始まる三月まで、わずか四ヶ月の期間に全部終了させねばならなかった。まさに悪戦苦闘の突貫工事を制覇したわけです。

この三月の二〇日に、「緑の大地プロジェクト」の眼目「アーベ・マルワリード（真珠の水）」第一期工事が、二〇〇三年の三月に始めて以来、丁度丸四年で終了を迎えます。現地スタッフと日本人ワーカーの血、大勢のレイバー達の汗、さらにアフガニスタンを背後から支援して下さっている日本の会員の方々の感動の涙が、一つに溶け合って「真珠の水」と変わり、それが渇いた大地を潤し「緑の大地」を生み出していくのです。今、一仕事終えた喜びと達成感が、四月からの第二期工事に挑む勇気と自信を与えてくれました。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

▼未使用の切手、ハガキを！

＊会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

＊一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

カフェの夜は更けて

ジャララバード事務所　杉山大二朗

千客万来

ジャララバード事務所で働いている頃に僕はカフェを開いていた。今流行のスタンド・カフェでもなく、怪しいボッタクリ・カフェではないのでご安心を。ここで云うカフェは、バザールに店舗を構えて営業しているわけではなく、スタッフハウス内の僕の部屋でカフェもどきの真似事をしていたに過ぎない。あくまで洒落なので、喫茶店を経営している方は本気になって怒らないで欲しい。

そんな我が部屋のドアにはCafé De Vaya Con Dios（神と共に行けという意）の屋号を掲げて毎晩のように経営していた。一番のお得意というか、入り浸っているのは本田の潤ちゃんで、人が疲れて寝ていようと強引に押しかける困った奴なのだ。「ねぇねぇ、大さん。B型の人って結構ズボラで我儘な性格なんですって！知ってましたぁ？」←悪かったな、俺はそのB型だ。喧嘩売っとんのか？

彼は今、血液型性格判断に凝っているようで、毎晩のように芸能人の誰某はこういう性格らしい、ということを延々と述べる。僕はまったく芸能界のことは疎く、日本にいてもテレビなんぞ見ないクチなので「知らんわいナ」と愛想もなく相槌を打ち、彼の為に珈琲を淹れてやる。すぐさま松ちゃんこと松永君もやってきて「浅田次郎の本は他にないっすか？」と本棚を物色して獲物がないと分かるや、すぐさま退却する。おーい、なんか飲んでけやー。その後には蓮岡アニィもやって来て「美味いチーズが手に入りましたよぉ。あとこれ新作の手作り健康ジュース！」とお土産を持ってきてくれる。ここでは僕が淹れる珈琲や紅茶の代金を貰う代わりに、客は食糧やビスケットなどのおつまみを持ってくるのが暗黙のルールだ。

「潤ちゃん、君は何かお土産はないのかね？」「いやー、今度ワーカー手当てを貰ったら、なにか素敵なものを持ってきますよー」「謝礼は形あるものでナ」。いつものように色んな四方山話に花が咲きはじめた頃に、木藪・横山の煙草スパスパコンビもどかどか乱入する。「坂本龍一の曲、かけてもらっていいっすか？　あ、これ煙草ドウゾ！」「大さん、腰が痛いんやけど揉んでくれんね？　はい、これ前金のウエハースチョコ。美味いよ」。いつしか僕がマッサージまでやっている、ここは一応カフェなんやけどねぇ。

夜もふけて、そろそろ看板の時間が訪れても、だーれも帰らない。殆ど新宿西口のしょんべん横丁にある呑み屋とかわらんな。「はいはい、もう閉店じゃ。はよう帰った帰った！」「うーん、最後にもう一曲、素敵なやつをかけてくれぃ！」。悪足掻きのリクエストに快く応えて「蛍の光」を流してお開き。おや、隣の芹沢さんの部屋から近ちゃんや進藤君の声が聞こえてくる。「バチン！バチン！」。呪いの様なリズムで不気味な音が轟く。ああ、花札やってんのね。隣は賭場だったのか。

遊びに一工夫

こちらの暮らしは、日本と違って不自由さを感じるのは事実で、気軽に外出して買い物に出掛けられるわけではない。しかし治安に気を配り現地の風習や文化を尊重するのは当然で、ワーカー各自に自制心がないと我々の活動に悪影響を及ぼすこともある。そうなったらストレスの解消法は自分で創意工夫して解決するしかない。ジャララバードオフィスの敷地内で空いたスペースを使って何かスポーツが出来るようにしようという話が出たとき、現地スタッフや日本人の間でも色々と案が出た。中にはバスケやバレーボールといった集団で出来るスポーツもあれば、中村先生と僕の柔道場（コンクリート床で瓦葺の屋根付き）の案も出て盛り上がった。しかし今まで黙っていた蓮岡アニィの「手裏剣場も捨てがたい」という案が出ると、みんな数秒間沈黙して「なんじゃそりゃ？」と爆笑した。と、まあこうして結局決まったのが、無難なところでバレーコート。現地スタッフが調達した資材で、あっという間に完成した。

現在、僕はペシャワルの病院で勤務しているが、パキスタン人・アフガン人・日本人のチームをそれぞれ作らせて、総当りのリーグ戦をするのも面白いじゃないか。休日にはベッド職人を招聘してベッド作り講習

会で習ったりした。遊びは自分で工夫して、物がなければないで想像力を使って遊び道具を作れば、結構愉しく何でも出来るもんだろう。いつでもどんなに忙しくても、愉しもうとする遊び心を忘れちゃいけないなと思う。仕事も遊びもみんな愉しそうにやっているのを見たら、遊戯三昧な人生をみんな共有しているとさえ感じられる。でも水路現場で一番愉しそうにしているのは、間違いなく中村先生だろうな。

チャクニに負けた わが二年半

灌漑用水路建設担当　松永貴明

チャクニはうまい

チャクニというものがある。食べ物である。すりつぶしたトマト・コリアンダー（という香草）・唐辛子・にんにくをヨーグルトにいれて塩でお好みの味付けをすればそれだけで出来上がってしまう。実をいうと、アフガニスタンに来て以来の私の大好物である。

特にジャララバード事務所専属コック、ラヒムラじいさんが作るチャクニは天下一品。ナンにつけてもよし、ごはんにかけてもよし、チャプリカバブ（揚げハンバーグ）、ピカウリ（アフガン風てんぷら）、以前会報で紹介したブラニィなんかにも最高に合う。

ともかくおいしいもんだから、ラヒムラじいさんに頼んで事務所の昼食のときに毎日出してもらうことにした。必要経費は私のポケットから出して。といっても、一日二〇ルピー（約四〇円）。これだけで事務所のスタッフみんなに配れるくらいの量は作れるのである。だから、事務スタッフは毎日昼食のときにチャクニを食べていた。

「お前がいないと……」

話は大きく変わりますが、私、二年半やってきたジャララバード事務所会計担当から水路事業担当に異動になりました。勤務地はもちろんジャララバード事務所から水路現場に。そうなると当然昼食は水路現場で食べることになり、ラヒムラじいさんのチャクニとはおさらば。水路現場基地のキッチンでも、コックのジェリルおじさんに頼んで作ってもらおうと試みたが、出来上がったチャクニを保存するための冷蔵庫がない（それ以前に電気がほとんどない）などの理由で断念した。

水路現場異動となってから二週間ほど経ったとき、所用がありジャララバード事務所へ行くことになった。現場勤務になってしまうと、事務スタッフとはほとんど顔を合わせることがない。たった二週間とはいえ、二年半の間苦楽を共にしてきた事務スタッフと会うのはすごく長い間会っていなかった感じがして、事務スタッフたちとのあいさつや抱擁がいつもより強く熱いものに。一通りあいさつを交わすと、事務スタッフの人が、

「ミスターマツナガ、もう事務所に戻ってこないのか？」

と、言ってきた。なんといっても二年半苦楽を共にしてきたスタッフ。みんな自分がいなくなったことを淋しく思っているのかと、勝手に得心していると、もう一人のスタッフが

「ミスター、お前がいないと……」

と、悲しげな顔。〝仕事がうまくいかないんだよ〟とか〝事務所がつまらないんだよ〟とか、アフガン人特有のお世辞が後に続くんだろうなぁ、と思っていると、

「昼メシにチャクニが出ないんだよ」

と言い放った。

そりゃそうである。もともと私が自費で出していたチャクニは、私が事務所勤務からはずれれば、自動的に事務所の昼食から消えるのである。

「そうだ、そうだ。チャクニがなくなったじゃねぇか。オレらの昼メシをどうしてくれんだぁ！」

と、他のスタッフが言うのを皮切りに、

「チャクニなしじゃ、メシが食えねぇ」とか

「チャクニ一ヶ月分のお金をラヒムラじいさんに渡しておけ」

と、言いたい放題。

どうやら、私のジャララバード事務所での二年半はチャクニに負けたようだ。

十代の若者達に鍛えられる日々です

灌漑用水路建設担当　本田潤一郎

現場でダイエット

アフガニスタンに来て早三年が経ちました。右も左もわからずに現地に飛び込んだ八五キロのパンパンな体も、三年経った今七〇キロのスリムな体になり、事務長の芹澤さんから「カッコよくなった」と褒めていただいたりしていまして、「今なら日本の若い女性にもてるかも！」と調子にのっている今日この頃です。

さて私は本来去年の秋にはワーカーを終了しようと思っていましたが、夏に進行中の水路現場が暴れ川の大氾濫により砂礫に埋もれ、今期の目標であるブディアライ村の通過が危ぶまれる状況に陥ったのを目の当たりにし、「ここで退いては日本男児の名がすたる！」と意気込んで任期を延期（どっかで聞いたセリフだが……）。今までの事務仕事から一転、現場監督として労働者を雇い、暴れ川の下を通すサイフォン構造物を担当する事となりました。

十代にして家庭を支える

本田組には大体二五名前後の労働者が働いており、日本なら工事現場には働いていなさそうなお爺さんから中学生位の子まで幅広くいます。自分も組長らしく出来るところを見せたいところですが、力も体力も全然及びません。まずシャベルの持ち方からしてわかっていない。農民の彼らは体の使い方が良くわかっていて、どこに力を入れればいいか体でわかっている。典型的日本の都会っ子の自分は、頭では思い描いても体が思うように動かないし、使いこなせてない。挙げ句の果てにはハンマーで岩を割るつもりが、足の爪を割って流血。危なっかしいと道具を取り上げられました。

体の使い方もそうですが、作業中に良く感じるのは創意工夫の発想力の凄さ。ここでは、物も無ければお金も無いから自分達でやっていかないと何も出来ない。それが前提だから良く考える。自分なんかは何か欲しければ店で買い、何か壊れれば修理に出す。そんなシステムが当たり前のように日本で過ごしてきたので、それがないとおどおどするばかりな事もしばしば。

この間、どこかの駅で停電になって大混乱していたけど、こっちの村はそもそも電気がないし（ランプ暮らし）、ガスなんて農民には高すぎて使えないから、男どもや子供たちは山や川に薪（たきぎ）を取りに行く。彼らのたくましさというか生命力の強さを見ると、

アリアナ大地の心 ―― 6

メヂカラ

甲斐大策

今日も目上・目下の語が通用する私達の社会である。大半の日本人は、話す相手と目を合わせるのを避けてきた。かつて、女性が男性を睨んで口を開く、などは捨身の覚悟を要した。暴力亭主を恨みの眼差しで見上げた女房殿がいう。

「思うさん打ちなはり、元あどっちかる惚れたかな（存分に殴りなさいよっ、先に惚れたのはどっちよ！）」（大正期、肥後狂句より）

今日、相手を見ない行為が、孔子の教えに根ざす慎みの嗜みとは思えない。列島を事勿れの智慧が覆った結果なのではないか。

エーゲ海やメソポタミア、アリアナ世界からインダス河畔、五千年程も昔から人物像の瞳は大きかった。これ等の地に生きる人々の瞳は今日も、古代人物像と同じように出会いから別れまで話す相手の瞳の奥底まで凝視めて動かない。多くの日本人が彼等の視線にたじろぐ。その視線の強さは、生きる意志そのものであり、それを支えるのは「信」を識る心なのである。そして口から出る言葉は現世のもの、その真偽は相手の目の中に判断するしかない。

昨今私達はメヂカラという語を耳にする。眼の力強い魅力や、そう見せる化粧法を指すらしい。しかし、塩鯖の眼にも似た眼の若者達との比較で現れたこの語は、寂しく響いて仕方ない。「信」や生きる意志の有無とは無縁な眼の話だからだろう。今日も巷には、虚ろというのもむなしい眼が溢れる。

何でもあるのが当たり前の今の日本は、贅沢な話ですが得でもない気がしてなりません。

また本田組の最大の特徴は、十代の中高生にあたる年齢の子達が多い事です。同じ年の子達が学校に通っている中、日当一〇〇アフガニー（二四〇円相当）を求めて働きに来ます。彼らは十代にして貧しい家庭を支える一家の稼ぎ頭であり、実際の仕事ぶりも成人男性に負けない働きを見せてくれます。そんな彼らに触発され、自分も体を動かし続け五ヶ月。労働者から道具を取り上げられる事も少なくなってきました。

最後にこの会報原稿を通して確かにこのアフガニスタンで人々が懸命に生活している事と、そして貧しい中でも日々祈りを捧げ神のお導きのまま生きようと希望を持って生活している事を証したいと思います。これが三年前まで全く知らなかった、三年間の生活の中で私が感じたアフガニスタン人々の様子の一部です。

救う、ことで救われた

灌漑用水路建設担当　石橋忠明

水のちから

救う、ことで救われた。人々に小麦の為の水を送ることで、逆に、人生のエールを送られた。日本では抜殻のようであった己が、アフガンで人の為に働いて、生き返った。

一〇ヶ月ぶりのクナールは一変していた。褐色の荒地が、緑の大地となり、農夫が畑を耕す。家家が建ち並び、店や学校も。水路沿いに、子どもたちが通学する。赤・青のランドセルを背に、走り、とび、ロバと戯れる。水水、水のちから、恩恵である。水、畑、メシ、家、学校、の順。その逆では無い。

しかし、感激に浸っている暇は無かった。更に下流では、みなが二〇日後の水を待っていた。到着早々、その為の分水路作りを任された。水の遅れは、来年の収量の半減か、全滅を意味する。顔では笑い、ハラをくくる。気合を入れて翌朝から開始、と思いきやカンジンの標高が心許ない。R4地点――モスク間一キロメートルをやっつけるのだが、各点の高さが??ということで、R4を〇メートルと設定し、最終点との落差を測り、順次水を落してゆく。富士山よりも高い雪山を左右に見て、公道・学校・商店・レンガ工場、と障害物競走よろしく、ニュートン氏の理に従って、一〇〇メートルにつき一〇センチの傾斜、所々ブロック製の段差を作り、進む。

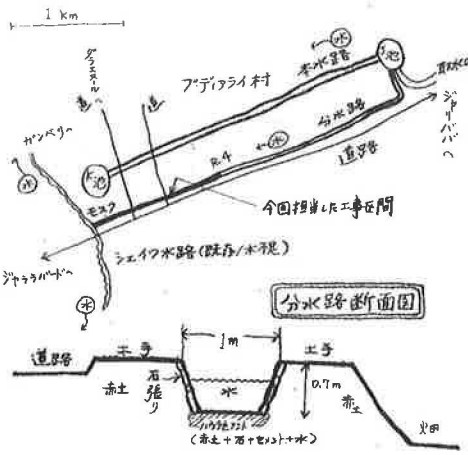
小なりとはいえ、万にのぼる人々が切望する分水路である。巾一メートル、深さ〇・七メートル、底はセメント入赤土、両側はアフガン人の大好きな石張り。二〇人一チームにエンジニア一人。七チーム作り、五〇メートルずつ分担。ここだけの話、互いの競争心をあおる。丁寧に芸術的に開始。徐々に、効率的スピーディーに、そして幾何級数的にドンドンと。しかし、原則は「丁寧に」である。

クーチー（遊牧民）かあさんのよく透る声が、らくだのねむい視線と交錯する。重機への叱咤は自分へのそれである。水路わきで、米軍下請のインドの会社が道を舗装している。銃の護衛付きで。我々は丸腰。空はどこまでもターコイズブルー。

苦労が風格を作る

さて、人の話。相棒の少年一四歳。水とメシを求めて転々。一〇人家族八人兄妹の長男。オヤジと共に我々や、地主の畑で働く。稼ぎは二人で月七五〇

本水路・分水路　概念図



○ルピー（一万五千円）。でかいナンが一枚五ルピーで買える当地では、まあ良い方。名前も書けぬが、頭、体、技、そして根性は抜群。水路を進め、その先にある自分の土地に家を建てたい、と云う。苦労が風格を作っている。もう一人。トンデモナイ運転手。土石を勝手に落とすは、指示と逆に走るは……。即「ヤツを切れ！」。その直後、天罰か？事故で車が大破。自分の息子よろしく説教。「この水路を何と心得る？　日本の心ある人々がナケナシ（失礼！）の金をハタイて、みなで作っている友好の水路だぞ。よく考えろ！」目の奥に元難民の哀しみをたたえつつ、微かに頷く。

……とまれ、どうにか「小麦」に間にあった安堵感で、モスクからダラエヌール道を眺める。アジア特有の人生観が土煙となって宙に舞っている。学校帰りの子らが喧騒を連れて、水を追う。最終点のレイバーは遅れじと最後の石積みをいそぐ。音入りのアフガン絵画。日本の善意が水に変わり、人々に届く瞬間である。ボロボロのオヤジが抱きつく……。

窮民・ドナー・ワーカーは一つである。目的は、互助と平和。一期工事完遂を目前にして、ある希望を垣間見ている。

●ワーカーOB報告③
農業を通じ、「一隅を照らす」

元・農業計画担当　橋本康範

三月一五日、甥が二歳の誕生日を迎えた。甥がこの世に生を受けての日数と私がアフガンから帰ってきての日数が同じである。甥の成長を見ながらアフガンから戻り、日本での生活が長くなっていくことに寂しさを感じるときがある。それは人が人として生きられる大地、人としての本当の幸せ、を感じたアフガンでの生活と時間的空間が開くことで、アフガンでの日々が遠く夢の世界になってしまうという焦燥感にも似た思いでもある。

日本に戻ってきて私は、アフガンで感じた思いを何とか具現化しようとそれを百姓の生活に求め、地元の有機野菜栽培農家への研修を始めた。畑での作業は本当に心地よく、土に触れているといつもアフガンを思い出した。そこだけは日本であってもアフガンとほとんど同じ風景が広がっているのである。そして、風景のみならず研修先の農家の周りには人としての生活、付き合いがムラとしての名残としてたくさんあり、それらも時々アフガンでの生活を思い出させてくれた。

しかし、自分の将来に漠然と不安を感じることも多々あった。そんな時、中村先生の言葉をよく思い出した。「一隅を照らす」、「柳緑花紅」。そして常に心にいる師匠である高橋さんに問いかけた。「今自分がすべきことは何なのでしょうか」と。

また、用水路現場の通水までの作業状況をよく思い出した。それは、クナール河の水位が上昇する前の三月上旬の通水を目指し、時間に追われ、巨大なプレッシャーに押しつぶされそうになりながらの日々だった。現場での作業は休日返上で行われ、朝は五時半から夜は八、九時まで、時に午前〇時を回ることもあった。当時、現場からへとへとになりながら車で宿舎へ戻る夜道、星空を見上げると、生きていることの実感を体全身で感じた。日本ではもう感じることはないだろうと思っていたが、百姓を目指していると、あの当時と似た充実感を味わうときがある。そんなとき、自分の選択が間違っていなかったと安心する。

昨春には、地元宮城からペシャワール会を応援できないものかと「ペシャワール会をみやぎから応援する会」を立ち上げ、〝中村医師に賛同し、宮城にて一隅を照らす〟をモットーに現地報告会、写真展などを開きペシャワール会の活動を地元の人々に伝えている。

また、今春から〝百姓への道〟の一環として、農業書を出版している職場へ縁あって勤めることとなった。これからも、甥の成長を見るたびに私の寂しさは増すことと思う。しかし、いつか甥が人を愛し、自然を愛し、家族を思い、地域を見つめる大人に成長したとき、私の寂しさは消え去る、そんな気がする。

中村先生始め、藤田さん、現地ワーカーの皆さん、必死の活動が続いていることと思いますが、無事に活動できること心よりお祈り申し上げます。会員の皆様、これからも変わらぬご支援よろしくお願いいたします。

●事務局便り

＊二〇〇三年三月十九日、灌漑用水路の掘削工事は着工した。あれから丸四年、ダラエヌール渓谷の裾野を通過する用水路に通水し、アーベ・マリワリード（真珠の水）用水路（第一期十三キロ）が完成した。四年前、着工直前のクナール川の岸辺に中村医師と共に佇んでいた時、全想像力を動員しても、未来に広がる風景は見えていなかった。

思い返せば二〇〇〇年から始まった大旱魃に対して井戸を掘りはじめたのが同年七月、さらに翌二〇〇一年三月からはカーブルに五ヶ所の臨時診療所運営開始、そして9・11事件。一〇月七日にはアメリカによるアフガン空爆の開始、十一月十三日にはタリバーン政権の崩壊。そのなかで私たちは「アフガンいのちの基金」を立ち上げ、空爆下のアフガンに小麦と食用油を送り続け、診療所を維持した。それは「アフガン緑の大地計画」へと引き継がれ、アフガン東部で一四〇〇本以上の井戸を掘り、三〇ヶ所以上のカレーズを修復し、ダラエヌールでは試験農場をもって復興の備えをしてきた。

アフガンの八割以上が農民といわれる。その農業国家が戦乱だけでなく大旱魃で不毛の荒地と化していた。その大地を甦らせるべくクナール川から十三キロの灌漑用水路を掘削する計画が立てられた。まさに前代未聞の大計画である。その時点では一人の専門家とていなかった。中村医師を先頭に、現地スタッフ、作業員数百名、日本人ワーカー十数名がこの四年間文字通り粉骨砕身の一五〇〇日でやり遂げたのである。そしてそれをバックアップしたのが、ペシャワール会の会員・支援者であり「緑の大地計画」に共感してくれた多くの寄付者たちである。

私たちが工事に着工した翌日二〇〇三年の三月二十日は、アメリカがイラクに侵攻した日である。私たちが黙々と用水路を掘り続けた四年間、アメリカはアフガンで空爆を続け、イラクで無益な殺戮を惹起し続けた。用水路に流れる水と、アメリカによって流される血の対比を思わざるを得ない。

ペ村から――――――♬

私とペシャワール会は中村先生がおっしゃる縁という意味で不思議なものを感じます。最初は福岡での発会式。出席したのは、当時先生の派遣母体のJOCS総主事の奈良常五郎さんに会うためでした。奈良さんとは半世紀近く前、神戸YMCA総主事の時からのつながりです。中村先生がペシャワールに赴任された後の八六年四月に急逝されましたので、私は会員になる様にとの御遺言だと思い入会して以来、ずっと会費を払うだけの会員でした。その後色々な事からフリーになり、年齢から考えて長く続けられる、又、知った方のいない場所でのボランティアをと考え、会の事務局をたづねました。以来一年半、気がつけばあちらこちらで会の宣伝をしている私です。（M）

丸腰のボランティア 中村哲・編
ペシャワール会日本人ワーカー・著

すべて現場から学んだ診療所をつくり、井戸を掘り、用水路を建設する――。現地日本人ワーカー47名による活動報告集　【重版】1890円

空爆と「復興」 【2刷】1890円
辺境で診る 【3刷】1890円
辺境から見る ダラエ・ヌールへの道 【3刷】2100円
医者 井戸を掘る 1890円【10刷】
医は国境を越えて 2100円【6刷】
ペシャワールにて 1890円【8刷】

聖愚者の物語 甲斐大策

「表紙をめぐる小さな物語」が、書下しを加え一冊に 1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24 TEL 092(714)4838

アフガニスタンの診療所から 609円
筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4 TEL 03(5687)2670

価格はすべて税込価格（税5%）です

会則

①本会の名称をペシャワール会とする。
②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。役員の改選は毎年総会にて行う。
⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇―〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル六〇三号 TEL七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル603
☎（092）731（2372）FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559
発行日　2007年4月1日　No.91　会長 後藤哲也　現地代表 中村哲　名誉会長　高松勇雄